

心の旅

# 山の文化史

## はじめに…山を広く深く知ってほしい

山を広く深く知ってほしい…この気持ちには、実際の山登りをさらに極めてほしい、という側面と、山登りの文学・芸術や思想・哲学・科学など、さらにわが国と世界、現在と歴史にも視野を広げ理解を深めてほしい、という側面がある。つまりは、実践的であり理論的でもある、総合的な岳人（学人）になつてほしい…が私の願いだ。

山好きな若い人たちはもとより、私と同じ中高年の人たちも、さまざまな事情で山に行けない時にはどう過ごしますか？山への想いをどのようになぐさめますか？…山に凝り固まつた人でない限り、日々巷（ちまた）には気晴らしは満ち溢れており、この問いに答えるのは簡単だろう。多くの人はそうして時を過ごす。そして山登りが趣味・旅行の範囲を超えない。

ここで、偉そうなことを言っている私の若い時も、もつぱら実践一筋、読むものといえば、ルートガイドもどきの、当時の月刊誌「岩と雪」や「山溪」やテクニカルな専門書くらいだった。ただ、山岳会の「会報」に山行ごとに記録やルート図をかくことが決まりとなっていたことが、私の山登りの質を高め、文学や思想の世界へ視野を広げることとなった。

ここでは、山に行けない時、さらに山が楽しくなるよう、山の理論的な側面（私の言う…心の旅＝思索の世界）を、先人の残してくれた書物を通じて、広げていくようガイドしていききたい（暇のある中高年になってやっと可能になった）。

## このテーマの目次

### 「登山の文化史…桑原武夫著・平凡社ライブラリー」

桑原武夫は…私の考えによれば登山とは文化的な行為である。文明人のみのなす行為である…と述べている。

### 「東西登山史考…田口二郎 著・岩波書店」

田口二郎は、北アルプスなどの探検的登山と、奥秩父など深林渓谷を親しむ静観的登山とに分類した。

### 「新稿 日本登山史…山崎安治著・白水社」

黎明期の登山の舞台は「上高地・北アルプス」が中心で、多くの本で詳しく紹介されているが、この登山史では、一方の「南アルプス」の登山についても詳しい。

### 「新稿 日本山岳文学史…瓜生卓造著・東京新聞出版局」

明治の小説家、幸田露伴、徳富蘆花、田山花袋、詩人、歌人の大町桂月、河東碧梧桐など、著名文人の山旅の作品や自然観が紹介されている。

### 「岩と人 日本岩壁登攀史…斎藤一男著・東京新聞出版局」

著者は、社会人山岳会で、尖鋭的な登攀で名の知れた「山岳同志会」の創設者の一人だけに、各章が岩登り讃歌にあふれている。

## 「登山の文化史・桑原武夫著・平凡社ライブラリー」

新書や文庫本で「桑原武夫」の著書は多い。私は恥ずかしながら、彼が登山家であり、山の著作を残していることを知らなかった。この「登山の文化史」との出会い、近藤信行の「山の名著」で紹介されていたからだ。この本を取り上げた意図は、田口二郎の「東西登山史考」とともに、欧州・日本の登山の比較論の輪郭が見えてくることを期待したからだ。

近藤は「山の名著」で、桑原のこのエッセイを：東西の文化現象の比較論であるとともに、自然と人間のかかわりからみたアルピニズム発生史論である。登山の流行を支えたものは市民社会の発達であり、自由な行動を享受することのできるブルジョアジーの出現が、文明の発達とともに登山文化を前進させた：と引用している。また、本書の巻末の解説で谷泰（たにゆたか）は、：この書物は戦中を通じた、開かれた精神を持つ知識人集団の存在証言となり、そこでの論が、文明的視点からみた登山論として、またいまや初登頂の対象を失った時代の登山者への指針として、なお示唆するところが少なくない：と書いている。

桑原は「登山文化史」のなかで：私の考えによれば登山とは文化的な行為である。文明人のみのなす行為である。：と明確な定義づけをしている。桑原はさらに日本の登山文化についてこう述べている：日本の山の先駆者は、行者や僧侶が主役であった（槍ヶ岳の播磨上人など）。：こういう先駆者は一体どういう気持ちで前人未踏の世界に入って行くこうと試し

みたのであろうか。：そういう果敢な行為は日本人の「自然との融和」という公式だけでは解けぬように思われる。私はそこに日本民族の古くからの性格をなしている実践性、行動性が現れているのではないかと思うのである。：明治になってウエストンを通して西洋登山が移入され、また楳さんのアイガー行などによって新技術が伝わり、たちまち目覚ましく発展したということは、明治以前に、江戸時代によい地盤ができていたことを示すものである。

一方、桑原はヨーロッパの登山文化についてこう述べている：私の考えによれば、近代アルピニズムの特色は、近代科学精神と結びつき、かつ非宗教的だ。：山は中世以来悪魔や龍の棲家とみなされていた。：近代登山が起るためには、山にまつわりついたこの迷信性あるいは神秘性が一応解消して、山が単なる岩と氷のかたまり、つまり単なる物質になることが必要であった。：宗教改革の力が相当大きかった。：プロテスタンチズムは合理主義をふりかざして迷信的あるいは神秘的要素を宗教から消し去った。：山の守護者であった聖母などを悪魔もろとも山から追ひ払って山を物質化するに役立った。そして宗教的登山が解消して近代的登山が生まれる基盤を作った。

：これと併行して近代アルピニズムの起源となり、またその指導精神となったのは近代自然科学である。：近代登山の指導精神が科学精神と相通するもの。：未知の探求、：次々と寄り困難な仕事を求めていくこと、あくまで人間に自然の支配の可能性を信じていること、等々みな然りである。

## 参考図書紹介 「登山の文化史 他」

著者 桑原武夫

出版社 平凡社（平凡社ライブラリー760）

目次

登山の文化史  
山岳の紀行文について  
戦時下の登山

積雪期の白根三山  
尾上郷川と中ノ川  
能郷白山と温見  
鈴鹿紀行

欧州山岳雑話  
服装と行為  
あの頃のこと  
山遊び  
なつかしさ  
立派な凡人

グラン・シャルモの北面（デュ・モンセル）  
雪崩と雪（クラーンストーベル）

初版あとがき／追記  
解説…文明史的現在からみた登山者への指針

**カバー紹介文**…京都大学教授で、文芸評論・社会評論などの広範な活動をした。旧三高時代より今西錦司、西堀栄三郎らとともに登山に打ち込み 1925 年、北岳・間ノ岳、仙丈岳の積雪期初登を記録したほか、フランス留学中にはメンヒ、グロース・クリューホルンなどにも登る。1958年、京都大学学士山岳会チョゴリザ遠征隊長を務め、登頂に導く。

**閲覧方法**…地元図書館にて閲覧（取寄せ含め）可能

**購入方法**…平凡社ライブラリー＝ 品切・重版未定 <2014.01 現在>  
アマゾン＝ 中古本¥1495～+送料¥250 <2014.01 現在>



この本との出会いは「奥秩父を讃えた人たち」のテーマで、小暮理太郎・田辺重治に関する本を探索して見出した。東西の登山文化・思想の比較論になる。内容については「あとがき」に的確に表されているので引用する。

…本書の主題は、世界の高山地帯に発生し、歴史的に発展した登山の姿を比較的に観察し、つぎに地域から地域への登山の伝播と波及の諸相を見ようとする試みである。その対象として、近代登山のモデルと見られる欧州アルプスと、それは異質の面をそなえた極東日本の山岳、さらに現代登山の主流の場となっている世界最高の山岳群ヒマラヤをとりあげた。

登山発祥の時期は世界でばらばらであり、そのやり方は各地で違っていて当然だが、その技術・道具や思想などは、発展・変化しつつ次第に継承され・伝播していく。そして一流の登山家はその様々なやり方を貪欲に摂取していくのかもしれない。題名には「登山史」と入っているが、通史として系統立てて書かれているというわけではなく、意味を持たせているのは続く「考」の方である。この本は言うならば、登山の「あり方・やり方」の比較研究書といつてよいだろう。

ヨーロッパアルプスやヒマラヤの登山史・比較論は他にも多くの書籍がある。この「東西登山史考」で興味を引くのは、第一章の二・「日本型登山の成立」の項である（いずれ別テーマ：秩父を讃えた人たち…で詳しく述べたい）。

…重治（注…：田部重治）の秩父への転換と傾倒は、この人の持つもっと鋭い感性と思索に基づいていた。彼は、…北アルプスの旅が、どこか懐かしみと潤いにかけているのを自覚した。…北アルプスの山行の意義は、激しい、動的で冒險的なものであったが、秩父に来て初めて山の部分を見ること、溪谷は溪谷として、森林は森林として、静かに山を鑑賞するようになり、これによって山の神秘を感じるようになる。

…秩父に誇るべきは、日本アルプスのような山容そのものでなく、深林と溪谷である。青葉の色、水の色、森林の幽趣。アルプス的な美には、包容的、伝説的な美、人生の温か味を暗示するものが欠けている。秩父では信越の山では見ることでできない美を味わい、山の魂に触れた。日本アルプスでは荘厳な超越的な天を憧憬する心地を味わったが、秩父では半ば超越的で半ば人間と交渉を持つ「一種おぼろげな、そこから味えばあらゆるものが融けて出そうな混沌の美」を感じた。自分が山の一部であるという感じ。…このように重治は、自然と人間の交流に深い親しみを抱いた。…それは登山の新しい流れとなり、登山界では静観派と呼ばれ、日本の登山の新しいジャンルとして大きな影響を持つことになる。

著者田口二郎は、日本の登山を探検的登山と静観的登山とに分類した。日本アルプスの例えの先にはヨーロッパアルプスやヒマラヤの登山が意識されているようだ。著者は、若い時に英国からのちスイス大使館員になり、戦中は朝日新聞のスイス駐在員となり、戦時報道の傍ら、スイスアルプスを満喫している。これが比較論の体験的背景となっている。

## 参考図書紹介 「東西登山史考」

著者 田口二郎

出版社 岩波書店（同時代ライブラリー223）

目次

第一部 アルピニズムの流れ

I 日本でのアルピニズムの展開

- 1 明治の登山の特性
- 2 日本型登山の成立
- 3 日本の登山家と山人

II ヨーロッパ登山史

- 4 モデルとしての西洋登山史
- 5 近代登山技術の成立過程

III 現代登山の流れ

- 6 技術の伝播と現代登山の普遍化
- 7 ヒマラヤ登山前史
- 8 現代のヒマラヤ登山

第二部 三人の日本人登山家

- 1 楨有恒の山を見る目
- 2 松方三郎のアルプス体験
- 3 今西錦司の山

あとがき



**カバー紹介文**…初登頂を志向する近代西欧のアルピニズム。深山幽谷が生んだ静観的な日本型登山。ヒマラヤの巨峰で展開した現代の冒険登山。それぞれの歴史的・文化的基盤を比較・考察し、登山の技術や流儀の発展、伝播、変容の歴史を興味深く語る。個性的な岳人達、その風貌や山岳観、数々のエピソードも巧みに織り込んだ書き下ろし。

**閲覧方法**…地元図書館にて閲覧（取寄せ含め）可能

**購入方法**…岩波書店＝ 品切・重版未定 <2014.01 現在>

アマゾン＝ 中古本¥535～ + 送料¥250 <2014.01 現在>

## 「新稿 日本登山史…山崎安治著・白水社」

「岳書縦走：雁部貞夫著」で紹介されている、山の文学や登山の歴史の本として、「日本山岳文学史（瓜生直造：一九七九年・東京新聞出版局）」や、「新稿 日本登山史（山崎安治：一九八九年・白水社）」を、いつもの貫井図書館で探した。同時に、興味あつて探した「岩と人：日本岩壁登攀史（斎藤一夫：一九八〇年・東京新聞出版局）」はみつからなかった。

私がこの登山史で興味深かったのは、とりわけ古代から明治前までの「山と人々のかかわり」である。「一、山の発見」での、古代からの原始宗教的な山岳崇拜から、「二、中世の登山」での、山岳宗教の修験・修行登山、さらには「三、近世の登山」での、富士講などの信仰登山、戦国時代・群雄割拠の時代の各地域・諸藩の、戦のための「地理Ⅱ地図・測量」、治山・営林のための「山林巡視」、漢方薬の「採薬探索」、金・銀、水晶など「鉱物探索」など、目的や役割を担った山とのかかわりがあつたことも再認識させられる。さらには北海道や、国内だけでなく樺太など北辺の探検と測量も加えられている。これらは明治以降の、測量登山などに継承されていく。

このように素朴な信仰的な行動や、きわめて宗教的な登山（開山など）、各藩の自治的な仕事、産業的な仕事など、自然や山とのかかわりがいかに深かつたことか。江戸時代には、科学や学術との関係を強めてくる。さらには、遊吟歌人・俳人の旅と山、文人墨客など、自然と親しむ、山登りそれ自体を楽しむ、といった風潮も新たに加わってくる。

明治以降、黎明期の登山の舞台は「上高地・北アルプス」が中心で、多くの本でだれ（外国人を含め）がどこに登ったか、詳しく紹介されているが、この登山史では、一方の「南アルプス」の登山についても詳しい。明治四年には、地元芦安村の「名取直江」が北岳を開山したとある。明治一八年に赤石岳、悪沢岳（荒川三山）が登られた。自分の登山歴と照らし合わせるとなかなか興味深い。

「五、日本アルプスの探検登山」では、明治のウェストンや小島鳥水から、日本の近代的登山（山を楽しむ登山）がはじまるとされている。日本山岳会の創設がその時代を象徴している。「六、アルピニズムの勃興」「七、バリエーション・ルートの開拓」では、日本のアルプスから、ヨーロッパアルプスへ、国内の厳冬の登山、岩登りの時代へ、「八、ヒマラヤへの道」「九、現代の登山」では、海外のヒマラヤへと展開していく。これらは私たちの年代の記憶の射程に入ってくる。

私の若かりし頃山岳会時代の経験に照らすと、「七、バリエーション・ルートの開拓」にある、「3、奥又白谷における登攀」の前穂高東壁、前穂高四峰正面各ルート、「2、北岳バツトレス」の中央稜・第四尾根（いずれも無雪期）など、開拓期・初登攀の記録が興味深い。

谷川岳や北アルプスなど、社会人の山岳会が主役に躍り出てきた時代（私たちの時代）は、「九、現代の登山 2、登山の高度化と大衆化」にわずかに触れられている程度だ。

## 参考図書紹介 「日本登山史」

著者 山崎安治  
出版社 白水社

1. 山の発見  
：
  2. 中世の登山  
：
  3. 近世の登山  
：
  4. 近代登山の芽生え  
：
  5. 日本アルプスの探検登山  
：
  6. アルピニズムの勃興  
：
  7. バリエーション・ルートの開拓  
：
  8. ヒマラヤへの道  
：
  9. 現代の登山  
：
- 巻後に (近藤信行)  
：



巻後に (近藤信行) から…作者の山崎安治さんが亡くなられて一年後に、遺著「新稿 日本登山史」が上梓の運びとなった…。復員後、日刊スポーツ新聞社にあって、編集委員など歴任したが、日本登山史の研究という未知の領域に足を踏み入れるのは、戦後間もなく大患に見舞われたからであった。…一年半の療養生活の中で日本山岳会の機関誌「山岳」をはじめ多くの山の資料を読み込んだ…。第一著作「穂高星夜」から、…最大の編纂物「日本登山記録大成」を完成…。本書はその延長上における著者の渾身の力が込められている。登山史家としての資料博搜とその集約と叙述が一体となって表れている…。

閲覧方法…地元図書館にて閲覧 (取寄せ含め) 可能

購入方法…白水社= 品切 <2014. 01 現在>

アマゾン=中古本 (86年版) ¥3950~+送料¥250<2014. 01 現在>



## 「新稿 日本山岳文学史」：瓜生卓造著・東京新聞出版局

今回、いつもの図書館から「新稿 日本登山史（山崎安治）」に続いて「日本山岳文学史（瓜生卓造）」を借りてきた。登山史の近代以降に現れる主役の登山者は、小島烏水や英国のウエストンはじめ、そのほとんどが自分たちの（先駆的）登山の記録（山岳紀行文）を残し、その考えを随想・回想として残した。主役は登山の先駆者でもあり、のちに山岳文学といわれる、従来の（旅の）紀行文とはやや異なる世界を開いた。

瓜生卓造といえは、私には小説家として名前に記憶がある。山に関係した人としての認識は全くなかった。フリー百科事典（ウィキペディア）で検索してみると、早稲田の政経学部の出ながら、芥川賞や直木賞の候補に名も挙げたこともあり、昭和後期の小説家として有名…とある。私の認識不足か、作品の一覧を見ると、山に関する作品を沢山書いており、出版も懐かしの「朋文堂」から、今もなじみの「山と溪谷社」までである。私には新たな発見であった。

この「日本山岳文学史」では、第一章 紀行文文学の母胎、第二章 文人墨客の旅、の稿で、古事記や和歌の時代から明治初期までの、旅と紀行文の移り変わりをその時々の人と作品を通して紹介している。

第三章 明治の黎明、第四章 山岳探検時代、の稿では、登山黎明期のウエストンや志賀重昂、さらには日本山岳会の小島烏水、小暮理太郎、田部重治、中村清太郎、武田久吉の

登山・探検歴、その思想と紀行作品が語られる。今日、この時代については、多くの登山史や紀行作品の紹介図書があり、内容的にもかなり興味深い。

第五章 新しい文人墨客、の稿では、明治の小説家、幸田露伴、徳富蘆花、田山花袋、詩人・歌人の大町桂月、河東碧梧桐など、著名文人の山旅（本格的な登山ではない）の作品や自然観が紹介されている。明治期の有名人がこんなにも山好きだったとは意外な気がする。

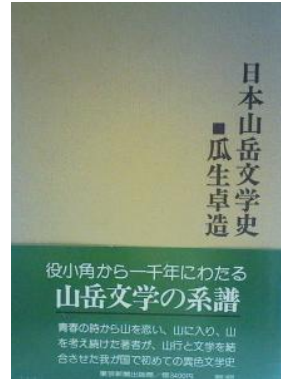
第六章 スポーツ登山の隆盛、第七章 山のモダニズム、の稿では、冠松次郎、藤木久三、大島亮吉、平賀文男、加藤文太郎が、さらに辻村伊助、榎有恒、三田幸夫、松方三郎、浦松佐美太郎など、の登山と作品が紹介されている。第八章 探検家の系譜、の稿では、河口慧海、鹿子木貞信、今西錦司、桑原武夫、最後の第九章 紀行家の種々相、の稿では、深田久弥、西岡一雄などが挙げられている。

この本は、四百頁を越え細かい活字で二段組みで編集である。なかなかの読み応えだ。しかし初めて読むには忍耐力を要するだろう。第三・四章、第六・七章で紹介されている時代の人物やその作品を読んでから、この山岳文学史を通して読むと理解が深まると思う。個別の登山家・紀行文などの作家とその作品を紹介している図書もある。近藤信行の「山の旅：明治・大正編」「同：大正・昭和編」、同じく近藤信行の「山の名著」、福島功夫の「山の名著30選」などがある。今回と同様、一括して紹介することをテーマとした。

## 参考図書紹介 「日本山岳文学史」

著者 瓜生卓造  
出版社 東京新聞 出版局

- 筆を起こすまで  
第一章 山岳文学の母胎  
：  
第二章 文人墨客の旅  
：  
第三章 明治の黎明  
：  
第四章 山岳探検時代  
：  
第五章 新しい文人墨客  
：  
第六章 スポーツ登山の隆盛  
：  
第七章 山のモダニズム  
：  
第八章 探検家の系譜  
：  
第九章 紀行家の種々相  
：  
あとがきにかえて



**筆を起こすまで から…**（すでに交友のあった、浦松佐美太郎から電話があり）  
「…どうだろう、一つ日本の山岳文学史というのを書いてみる気はないかい。日本文学史、とくに明治以降は小説史になっている。紀行、随想にも立派な歴史があるはずだ」（と提起される）。…たしかに私（瓜生卓造）は、たくさんの山岳書を読み、また読まされてきた。私の読書の目を開いてくれたのは山岳書であった。…文学史といえば、上に山岳がつこうとも、歴史であり、学問である。…ふしぎにいつか書かなければならない、という義務感めいたものさえある。…欲望に似た義務でもある。山に酔い、山に登り、山の本を読み漁った私の青春の記録として、私なりの山岳文学史があっていいのではないか、と思うようになった。

**閲覧方法**…地元図書館にて閲覧（取寄せ含め）可能

**購入方法**…東京新聞 出版局 = 品切 <2014. 01 現在>

アマゾン= 中古本¥1240～+ 送料¥250 <2014. 01 現在>

## 「岩と人 日本岩壁登攀史・斎藤一男著・東京新聞出版局」

これまで紹介した「新稿 日本登山史（山崎安治）」や「日本山岳文学史（瓜生卓造）」は容易に見つかつて入手できたが、同時に、興味あつて探した「岩と人：日本岩壁登攀史（斎藤一夫：一九八〇年・東京新聞出版局）」は、アマゾンの中古本の検索でもなく、貫井図書館に調査依頼し、結果、新宿中央図書館からの再貸し出しで入手できた。

著者は、社会人山岳会で、尖鋭的な登攀で名の知れた「山岳同志会」の創設者の一人だけに、各章が岩登り讃歌にあふれている。あとがきの一節に次の表現がある。：「登山とは創作なり。岩登りは動的でしかもロマンチックなもの。：冷たく、ザラザラした肌ざわり、固い岩肌に温かな人間のぬくもりがふれるとき、血沸き肉躍り、緊張感に五体はおののく。全身全霊に沸騰する生命力、何物をも燃焼し尽くす猛烈な闘志は、案逸から冒険へと駆りたてる「岩の呼ぶ声」なのだ。これこそ「岩登り」のみがもつ摩訶不思議な魅力ではないか。：。今の年齢で読めば、すこしく大げさの感も否めないが、登攀していた現役のころの私自身の心境でもあつた。

この登攀史にも、無雪期から積雪期への尖鋭的な初登頂・縦走と、森林と渓谷をめぐる静観的な山歩き、岩登りと沢登り（溪谷通行）、大学山岳部か社会人山岳会か、国内の登山か海外の登山か、ハーケンカラビナの登攀か埋め込みポルトを使った人工登攀か、など対峙的な概念論争が描かれている。登攀史としてみれば、これら古典的なアルパインクライミン

グからフリークライミングへと、さらには同列視できないインドアのスポーツクライミングへと変化がめまぐるしい。

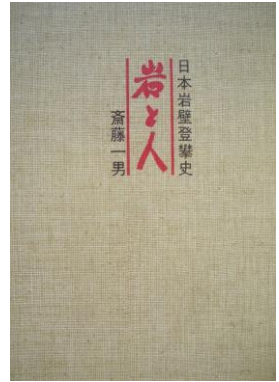
私がこの岩壁登攀史で興味深かつたのは、やはり自分が実際に登攀した、谷川岳の一ノ倉沢・幽ノ沢、北アの奥又白からの前穂高岳東壁・四峰正面壁、南アの大樺沢からの北岳バットレス第四尾根・中央稜などの無雪期・積雪期の初登攀の記録である。穂高の屏風岩や滝谷、剣岳の岩場など、あこがれていた登攀の記録もその次にくる。私も岩登りを始めた頃、慣れ親しんだ丹沢の沢登りについても書かれている。

もうひとつの私の興味は、私の活動していた時期（若い時の山岳会＝登稜会での活動時期）が、この登山史・登攀史に書かれている同時期と照合することにある。当時の登山界の全体での位置づけを知りたい思いからだ。谷川岳に注目しても、昭和三十三年、谷川岳の一の倉沢・コップ状岩壁・衝立岩正面が無雪期・積雪期に初登攀された。そして衝立岩の宙づり・狙撃事件、中越地震での岩場の崩壊へと続く。尖鋭的な登山者や山岳会の名前が、そして当時のこれらのビッククライムが、私の記憶にもすっかり植えつけられている。

加えておきたいのは、ここにも出てくる山岳雑誌のことである。「山と渓谷（今も継続出版）」や、「岩と雪（すでに廃刊：類似のROCK&SNOWが現在、山と渓谷社から季刊出版）」が頻繁に出てくる。私も北岳バットレスの岩登り合宿をした時、このバットレス特集の「岩と雪」をバイブルのように熟読した記憶がある。

## 参考図書紹介 「岩と人 日本岩壁登攀史」

著者 斎藤一男  
出版社 東京新聞出版局



序章 クライマーの系譜

第一章 学校山岳部の全盛

その先駆者／魅惑の岩稜線／  
氷壁への挑戦／夢の極地法／  
／人工登攀の序曲／谷川岳からヒマラヤへ

第二章 社会人たちの活躍

世にも不思議な出来事／社会人山岳会の躍進／  
谷川岳コップ状岩壁／世にも不思議な物語／下界的岩壁

第三章 より困難を求めて

アイガー北壁の生と死／冬のアルプスとの苦闘／未踏への探索／  
先駆者と後継者／溪谷への傾倒

第四章 見果てぬ夢を抱いて

ヒマラヤ鉄の時代／エベレスト南西壁への道／  
世はスピード時代／さらば70年代

主要登山年表

あとがき

**あとがき** から…今まで、登山は行くたびか限界を迎えた。先人たちは、そのつど行き詰まりを打破し、進路を開拓した。岩登りでの「危険」は「困難」の範疇に、六級ルートは五級へ、五級は四級へと、歳月と人間は容赦なく岩登りの評価を変えていった。そしてその勢いは積雪期の単独登攀へと駆り立て、無酸素登攀へと飛躍の一途をたどっている。いったい岩登りの世界には“不可能”という言葉がないのだろうか、と不審をもたらすほど素晴らしい人間たちに万来の拍手送って止まないのである。

**閲覧方法**…地元図書館にて閲覧（取寄せ含め）可能

**購入方法**…東京新聞出版局＝品切 <2014.01 現在>

アマゾン＝中古本（80年版）¥1500～＋送料¥250 <2014.01 現在>